

白隠慧鶴と禅病

花園大学 小川太龍

本発表は白隠慧鶴（1686-1769）が説いた「禅病」について、これまで指摘されていなかった彼独自の語義を明らかにし、それが彼の修証論を理解するうえで重要な位置を占めていることを論じるものである。

白隠は、江戸中期の臨済宗僧であり、現在の日本臨済・黄檗両宗が、彼の接化手法と禅思想を継承していることから、「臨済禅中興の祖」と尊崇されている。また彼は、仮名法語を含む多くの著作や墨跡・禅画を残しており、一般への接化に力を注いだことでも知られている。禅病とは、「禅定を妨げる妄念」や「過度の坐禅修行により生じる心身の不具合」を指し、主に後者の意で知られている。そして白隠は、禅病について詳しく言及している。彼の著作である『夜船閑話』や『遠羅天釜』は、自身が青年期に禅病を得るも、それを克服したことを述べており、白幽子なる人物から授けられたとされる、その治療法——内観法・軟酥法——の詳細を記している。

これまで、「禅病」が現代的な精神疾患に通じると考えられることがあり、また、白隠が前述の両書で具体的にその治療法を記していることから、白隠の所説から禅の健康法を抽出したり、現代的な精神医療への応用が論じられたりすることがあった。また、白隠が説く治療法の淵源についての分析も試みられている。一方で、白隠の説く禅病への対処法を修証論と交えて論じるものがあるものの、十分な議論は尽くされていない。

そこで本発表は、後者の着眼点をさらに推し進め、これまで指摘されることのなかった白隠が独自に用いた禅病の語義を指摘したうえで、彼が説く修証論における禅病の位置を明らかにすることを目指す。すなわち白隠は、禅病という語を広狭二義で用いており、先行研究は基本的に狭義のそれを論じたものであり、本発表ではこれまで分析されることのなかった、広義のそれを指摘する。それは、白隠がくり返し批判した、ありのままを是とし枯坐黙照する、いわゆる無事禅に安住することを指して独自に禅病とよぶものであり、さらに、これが狭義の禅病とも重なるのである。

本研究は、以下の手順で分析を進める。(1) これまで着目されてきた白隠の説く禅病について改めてまとめる。これは本発表がいう狭義の禅病にあたり、白隠が説く禅病の総体を理解するために必要な作業となる。(2) その後、本発表で新たに指摘する広義の禅病——無事禅への安住——について確認したうえで、広狭二義の禅病の関係を分析する。(3) そして、白隠が説く禅病とその対処について、彼の修証論における位置づけを論じる。

以上は、白隠が説く禅病の分析にとどまらず、彼の禅思想を理解する一助となるだろう。

キーワード：無事禅批判 悟後の修行 坐禅 下化衆生